

12.8 地理って、どんなことを学ぶのか。役に立つ地理とは・・・

「地理」とは、我々が暮らしている土地の様子のことを対象にして陸や海の地形、気候、人口、都市、産業、交通などのことと辞書では説明されています。人によっては地図帳や理科年表とか国勢図会の統計などを連想される方もいるかもしれません。

地理は暗記物でもなく物知りのためのものでもありません。また、解説でもなく、情報を広い視野で分析し、先を読み自然と共生していくための指針を提示する実践学なのです。地球で起きる出来事は、私たちの行動と暮らしに密接に関係していることを教えてくれるものでもあります。

現在は、小学校の社会科で地理的環境を学び、中学校では社会科で地理的分野として学習し、高等学校では地理総合として必修になっています。地理を学ぶということは、大きく3つのことが言われており、それを目標にしてさまざまな取組みがなされています。

一つ目は、自分の暮らしている地域から、日本、世界へと視野を広げて、多面的に多角的に探究していくことでより深い世界観をもって現象や事象を考えるということです。つまり、情報に基づいて分析していくということになります。

二つ目は、様々な知識だけでなく、自ら調査することで、どうすれば生活環境が維持継続されるのか、地域にふさわしい持続性のある地域環境について考察することです。そのためには、自然現象や経済、文化だけでなく、地域で暮らしている人々の考え方を聞き取ることも重要なこととなります。

三つ目は、最近重要視されてきているところの、知識や技能、技術を踏まえて、さらに思考、判断をして将来の構想をすることです。つまり、課題や問題点を明らかにして、将来への課題解決する創造性を身に着けるということです。

これらのことがらは、防災ということでも発揮されることで、生活環境が変化するという視点で考えていくことで、自然災害への関心が高まります。そして、その備えを構想することで、防災とともに安全で、安定した社会を日本そして世界が維持継続する明るい未来へ貢献できることにつながります。

日本列島は、自然災害の博物館といわれるぐらいに世界的にも高い頻度でさまざまな災害を経験します。例えば、地震でも発生する異なる現象は平野部や造成地といった土地の違いでも多様な被害が現れます。火山噴火にしても規模の違いでその影響は異なります。また、大雨といっても、梅雨、秋の長雨、線状降水帯、台風があり、日本海側では例年大雪となり融雪災害が多発します。このような自然現象は、近年の気候変動もあって、現象が多様化してきています。私たちはこの日本列島で暮らすわけで、自然環境の仕組みを学ぶことで相手を知り、災害が起きても、被害の最小化、適切な避難で命を守るというように、意識を強くした上で生活環境を守る社会の仕組みを、構築していく必要があります。それには、科学的な知見とともに経験知が大事なことです。国土地理院や地方自治体でも様々な地図を介しての情報が公開されています。そのような情報を読み解いて、防災へ応用していくというツールは、地理という科目の中で学習することができます。